

人と語る

写真とは、自分の命と動物の命との共鳴

動物写真家 久保敬親さん



くぼ・けいしん

1947年新潟県佐渡市生まれ。日本の野生動物や自然を撮り続ける写真家。野生動物の美しさを繊細に捉える感性に数多くのファンがいる。作品には、タンチョウ、オジロワシ、マガンなどの野鳥をおさめた『鳥影』（山と溪谷社）、10年の歳月をかけて大雪山にキタキツネを追い続けた『キタキツネの贈り物』（新潮社）、『Peace Peace Peace』（七賢出版）、『野鳥賦』（日本カメラ社）、『鳥Birds』『野生 Animals』（山と溪谷社）などがある。



いつも動物のことばかり考えていた。

—動物に対する興味はいつ頃から。

もの心ついた時から動物が大好きでした。幼少期に読んでいたのは動物図鑑ばかりで、鳥の古巣を家に持ち帰っては机に飾っているような子供でした。本格的に鳥の観察を始めたのは高校に入ってからです。無断で屋上に置かれた古い机を使って巣箱を作り、先生に叱られたこともありましたが(笑)。

—写真を撮りはじめたきっかけは。

高校生の時、5月の連休に所属する野鳥サークルで、奥多摩へ2泊3日のキャンプで巣箱観察に行った時でした。雨降りの下山途中、芽吹いたばかりの新緑の梢で、雨に打たれながらわたってきたばかりのオオルリが、朗々とさえずっていたんです。コバルトブルーの美しい姿はもとより、その生命感あふれた光景に痛く心打たれました。「この思いをいつまでも色あせないように残したい」。しかし、残念ながらその時はカメラを持っておらず大いに悔やんだのです。やがて大学に入り、カメラとレンズを買い求め、撮影にのめりこんで行きました。今思えばあの経験が動物写真家を志すきっかけになったのかも知れません。

—もともと動物写真家を目指していたのですか。

大学は商学部でしたので、一般企業に就職するつもりで内定を頂いたのですが、いざ進路が決まると「自分の進むべき道は本当にこれで良いのか」という疑問が芽生えてきました。会社に就職すれば安定した生活が送れるかも知れませんが、大好きな動物や自然と触れ合う機会が激減してしまう。一度しか無い人生、後悔はしたくありませんでした。1週間眠れず悩みぬき、結局、内定をお断りして写真家の道に行くことを決心しました。

—写真家としてのデビューはいつですか。

動物写真家として生きて行く決意を固め、卒業間近に故郷である佐渡島へトキの撮影に渡りました。まだ写真家としての具体的な仕事は何も決まっていませんでしたが、「プロの動物写真家として生きるのだ」と故郷に誓いを立てる気持ちで、プロとし

人間も動物も無い、大切なのは命への共感。

て初めてトキの撮影に臨みました。3年後、その写真は毎日グラフ『日本の野生』という連載のトップを飾ることになりました。またこの写真は、1998年に出版された小林照幸氏のノンフィクション『朱鷺の遺言』のカバー表紙にも使われています。

—もっとも印象に残っている撮影は。

伊豆沼のマガンの撮影に熱中して28年間も通いました。それまで、鳥を撮るとすれば鳥にしか目が向かなかったのですが、伊豆沼でマガンを撮るうちにマガンだけでなく命そのものを育む自然の偉大さに魅了されました。人間がいくら撮影テクニックを駆使しても大自然が描く演出には到底かないません。この撮影を通じて、大自然の中で生きる動物の命を写真の中でどのように表現するべきか真剣に考えるようになりました。

—久保さんにとって動物写真とは何ですか。

写真とは被写体と自分との対峙。それは、自分の命と動物の命との共鳴を写真で受け止めるということ。「写真を通して何かを伝えたい」なんておこがましくていけないですが、人間だから動物だからと区別することなど無い、命の共感是一体なのだということを私の写真から感じ取っていただければ嬉しいですね。

—動物写真家としての原動力は。

カメラを抱えてフィールドへ出かけて行く時の高揚感でしょうか。今日はどんな発見があるだろうか、もしかしたら思いもよらない動物との出会いがあるかも知れない、そんな気持ちの高まりが今も原動力になっています。また、ファインダー越しに動物と向き合っていると自分の知らない意外な側面を発見することもあります。たとえば、アカゲラが可愛い花の中で戯れる姿を見て心が明るくウキウキする。こんなオジサンでも少女のような心を持っているんだと気づいて驚くことがあるんですよ(笑)。相手が自然なだけに、自分自身が納得できる写真を撮ることは今までもこれからもきっとないでしょう。ですが、やりたいことに向かって走り続け、最終的に「これぞ我が人生!」と笑えるようでありたいです。



■ プレゼント

ヒグマの楽園 ポプラ社 2008年出版

北海道知床半島のヒグマを追いかけた、久保さんの命がけの写真集。ヒグマの写真もさることながら、写真に添えられた久保さんの文章が魅力。凶暴な動物として知られているヒグマ。しかしそんな危険を冒してまで撮影へ向かう久保さんの動物への情熱や愛情、そして同じ命としてヒグマと向き合う「命の共感」を感じる作品です。この写真集を1名の方にプレゼント致します。ご希望の方はハガキかFAXで住所、氏名を明記の上、下記の宛先にご応募ください。弊誌へのご意見もお書き添えいただければ幸甚です。



宛先/〒144-8551 東京都大田区南蒲田2-16-46 東京計器株式会社 社長室 Views編集部 FAX番号 03-3733-3690
締切:2015年5月31日(当日消印有効)ご応募が多数の場合は抽選とさせていただきます。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。